

魔法使いの災薬

く入れ替わる悲劇、
或いは喜劇く



魔法使いに弟子入りをして、およそ七ヶ月が過ぎた頃。

換気用の小窓せうまどさえない階段は、どこを向いてもコンクリの色で、蓄積ちくせきされた熱と湿気で蒸し風呂のような様相ようさうを呈ていしていた。肺呼吸をする生物がそこを昇るか降りるかするたび、空間内の酸素が減つては二酸化炭素が増えるばかりで、日を重ねるほど息苦しくなっていく。このまま何も変わることなく、今後も同様に年月としつきが過ぎれば、いずれこの空間を占めるすべての空気は、僕の呼吸器官を経たものだけになるかもしれない。

「もし本当にそこまで行ったら、その空間はもうキミの体内と同義とも言えるよ」

カーテン代わりの暗幕を窓一面に引いた最上階で、さぞかし興味もなさそうに、それでいながら冗談とさえ聞こえない声色で、魔法使いは言い放つ。「そうなった場合、何か良いことあるんですか」と僕が問うと、「特にないし、意味もない」と返答があつて、会話でさえも意味なく終わる。

ホームセンターで買った銅線しよせんを触媒しゆばいにした魔法使い式の光源装置が、さながら蝋燭ろうそくのように緑色の炎を揺らめかせ、事務机に突っ伏す魔法使いを照らし出していた。春先にパン屋はんせきの販促キ

ヤンペーンで貰った地味な皿に、食べかけの棒アイスが載っていて、半分くらいが溶けている。扱ひ方がまるで煙草だ。

「それ、今日で何本目ですか？」

僕の問いに、魔法使いは答えない。師匠のわがままは日常茶飯事だったが、梅雨を終えた真夏の暑さで溜まりに溜まった苛立ちいらだちは、そろそろ許容範囲を超えそうだった。

引き籠こもり師匠への嫌がらせついでに薄暗い部屋を照らしてやろうと思ひ立ち、蛍光灯のスイッチを指先で探す。古すぎて壁に陥没かんぼつしたスイッチは、魔法使い曰いわく「小さなスライムを素手で押し潰つぶしたとき」と同じ感触らしく、思ひ出すたび気持ち悪くなる。

「ぶにゅっと抵抗があつて、最後にパチンと行くんだよ」と、胃液を逆流させる直前みたいな表情で語った魔法使いの顔が、人工的な青白い灯りから逃げるよう事務机に突つ伏す。太陽という存在すら否定したような色白の肌を、床まで伸びる灰色の髪かみが滑すべるのが傍目はために見えた。

事務机に反響こうごうした抗議こうぎの声はくぐもっていて、僕は聞き取れなかったフリをする。学校指定の鞆たもとを置いて給湯室きゅうとうしつへ向かい、粗大ゴミ置き場から拾ひろつてきたらしい小型の冷蔵庫を開けると、先日買かって入れておいたばかりのアイスの箱だけが入いっていた。

ひとつひとつが小さいとは言え十二本入りの棒アイスが、二日くらいで消えて無くなる摩訶まか不思議ふしぎ。百歩譲ゆずって、空からになったなら箱は捨てるよと内心で毒突きながら部屋に戻ると、師匠

の裸足はだしの爪先が、足下のゴミ箱をそつと事務机の下へ押しやる瞬間が見えた。全てが面倒になつてきて、それすら見なかったことにする。

「ついでに何か飲み物ちようだい」

厚顔無恥こうがんむちな師匠の言葉。ほんの半年くらいの前のことだが、僕はどうしてこの人でなしの弟子になつたか思い出せない。

冷え冷えのアイスの箱を潰たして畳み、また冷蔵庫を開ける。普通は食料庫として使われるはずなのに、そもそも人体が摂取せつしゅして良さそうなものさえ見当たらないのはなぜだろう。

「人体に悪影響としか思えない色の液体が入った試験管しかありませんけど」

「それはそれで美味しいけど、できればこの世界のお茶がいい」

「この青紫色に発光してるやつでいいですか？」

「それは胃袋をふたつに増やす薬」

「そんなもん、どんなタイミングに飲めと？」

蛍光灯に怯おびえるように、魔法使いがのっそり顔を上げた。眩まぶしそうな、あるいはただ単に眠そうな瞳が僕を見る。

「この世界の女の子って、胃袋がふたつあるんでしょ？ わたしにもあれば便利だなと思って」

僕の師匠は真剣な声色で、なんかもう良くわからない発言。

「……もしかして、甘い物は別腹ってやつですか」

「そう、それ」

理解できた自分が怖い。

手に持っていた試験管を元の位置に。興味本位で奥を覗くと、女兒用玩具のミニチュアハウスで薄氷色の小人が寝ていた。新しい同居人かな？

興味はあったが知りたくはなかったので、起こさないようそと扉を閉めておく。

結局何も取り出さなかったが、二度と冷蔵庫を覗く気がなくなった。癩だが自分も喉が渴いてきたので、コンビニにでも行くしかないだろう。

「唐突だけど」と魔法使いは前置いて、立ち上がりながら伸びをする。長すぎる髪が床を掃き、埃が舞った。今度切ってやろう。

「蛍光灯とか冷蔵庫とか、この世界で生活していると魔法なんて馬鹿らしくなってくるよ」

「隣の芝は青いらしいですから」

師匠の言葉を適当に受け流し、僕は「買い出しに行ってきます」と部屋を出る。またあの蒸し暑い階段に足を踏み出し、勝手に閉まる扉の軋みを背中に聞いた。

ローファアの踵を踏み鳴らし、コンクリの階段を下りきる。朽ち果てた郵便受けにピザ屋のチラシが突き刺さっているのを見つけて、こんな廃墟も同然の雑居ビルを自分以外の誰かが

訪れたという痕跡が、妙な同情心を僕に抱かせた。

♀

「何ですかコレ」と僕は問う。見た目はわかるが意味がわからず、僕は事務机の上で威風堂々と屹立する魔法使いを辟易した目で睨め上げた。

「キミが青い芝が良いって言うから」

僕を見下ろす魔法使いは、怪訝そうに小首を傾げる。悪気の欠片も見えやしない。

床板もなく、ひび割れたコンクリが剥き出しになっていた部屋は一面、気持ち悪いくらい真っ青な芝で覆われていた。そうじゃねえよ。

今更言うのも妙ではあるが、師匠はこういう魔法使いだ。主に人間や動物など、有機体にする魔法薬の精製を得意とするが、おまけで言うと落ちこぼれ。

科学を修める僕らのような現代人に言わせてみれば、少女の御業は神の力に匹敵しよう。しかし彼女に言わせてみれば、これは僕らが朝食を作るのと同じようなものらしく、褒めるとそれなりに嫌な顔をされる。僕らの言葉で言い換えてみれば、「ガスコンロに火を付けられるなんて凄いですね！」と褒められるようなものなのだろう。

加えて言えば、僕らがそのガスコンロで料理を作るような些細なことを、このお師匠様はで
きないらしい。なまじ家柄だけが良すぎるせいで、学舎での成績不振は家族一同の顰蹙と怒り
を増長させて、鬼畜の異世界追放という究極の処分。誰の力も借りられないこの世界から、自
力で帰ってこられたら許してやろうと言いつつ放った父親は、そのとき間違ひなく悪魔だったと少
女は語る。

その壮絶な話を聞いたとき、僕は本気で同情もした。父親のほうに。

なぜか。

どうやらこの魔法使いには、元の世界に帰る意欲が素粒子ひとつも存在しないらしく、日が
な一日を怠惰に努めて生きている。今となつては、もはやただの家出娘だ。もうすぐ夏休みの
宿題に追われるだろう自分のことと比較すれば、少女は清々しいほど自由にすぎて、一周回つ
て羨ましい。

「まあ、別に良いか」

師匠の境遇と床の境遇、双方に対して投げやりな独り言を呟いて、僕は後ろ手に扉を閉めた。

僕らの良く知る緑の芝とは似ても似つかず、心なしか発光さえしている青い芝生は踏み出す
ことすら躊躇われるが、少なくとも害はなさそうなので、遠慮無く土足で踏みつける。懐かし
い踏み心地をローファー越しに感じられて、全力でポジティブ思考。絨毯みたいなものだと思

おう。

夏の湿気で結露塗れのペットボトルを差し出すと、代わりにフラスコを渡された。床一面を青芝だらけにした大元であろう同じ色合いの液体が、僕の手中で水面を揺らす。

流しに棄てると配管に青芝が生えそうだったので、青芝薬はそのまま薬品棚へ。師匠が気まぐれを起こす都度増えていく魔法薬の在庫は、そろそろラベルでも貼って整理しないと処分にも困る。

「それでも整理はしたんだよ」と、魔法使いが頬を膨らし、ペットボトルを差し出してきた。怠惰を極めて、ついにペットボトルの蓋すら開ける筋力がなくなったらしい。

「鍛えましょう。そしてたまには外出しましょう」

「滑るんだもん」

子供のように口を尖らせ、魔法使いは小さな顎に皺を寄せつつ手の平を拭う。いつも来ている白いワンピースは魔的な何かで汚れないらしいが、逆にそれで手の水滴が拭えるのだろうか。

「そのうち本当に、箸より重たい物が持てなくなりそうですね」

「そう言うことなら大丈夫」

少女はふふんと鼻を鳴らして、腰に手を当て平らな胸を反らして見せる。いちいち態度が子

供っぽいが指摘はしない。

「ちやんと対策は考えてある！」

謎の自信に充ち満ちた表情で、魔法使いはくるりと回る。半開きだった———というか、開けたら閉まらなくなった事務機の引き出しに白い細腕を突っ込んで、奥から取り出すのはふたつの丸薬。いや丸薬というか、大きさ共々見た目は飴玉。

「運動しましょうよ」

「ソレはソレ、コレはアメ」

丸薬改め、飴玉のひとつを口に入れ、魔法使いはモゴモゴ言いながら僕におやつのお裾分け。
しきゅう 至急応援要請、話の脈絡が行方不明。
みやくらく

「ちなみにイチゴ味」

「味を気にする前に、保存法を気にしましょうよ」

錆び付いた事務機に丸腰で収められていた飴玉を受け取るが、口に含むのはさすがに躊躇う。
ほりそう しかし包装もない飴玉を真夏にずっと握り込んでいるわけにもいかないので、食べるしかない。
 さすがに腹は壊さないだろう。

後になって考えてみれば、疑う余地は山ほどあった。まず引き籠もりの師匠は外出どころか靴も無くした有様で、買い出し担当の僕は飴を買ってきた記憶もない。

「隙すきあり！」という掛け声と、視界に揺れる灰の髪。痛くはないが背中に強い衝撃があつて、魔法使いに物理で殴られたと理解した瞬間、反動で飴玉が喉の奥へ滑り込んでいく。食道を巨大な飴玉が潜くぐり抜けていく感覚が恐怖しか産まない。

「殺す気ですか!？」という僕の抗議こうぎは、しかし喉から出てこない。滲にじんだ視界が歪ゆがみを増して、天と地がひっくり返るような浮遊感があつた。

右に左に、上へ下へと引つ張られるような奇妙な目眩めまい。真つ青な芝生に顔面から倒れ込み、衝撃だけが頭に響ひびく。跳ね返るように天井へ飛ぶと、地面に転がる自分が見えた。

謀たばかられたとようやく気付くが手遅れで、僕の意識は強風に吹き飛ぶ。



「死ぬかと思つた」

強打した額ひたいに触れながら、僕はソファに腰掛ける。古く錆び付いたコイルスプリングがバキバキと、子犬を圧搾機あつぱくに掛けるような凶悪な軋みを上げて深く沈んだ。

「と言うか、良く死にませんでしたね」

巨大な飴玉を飲み込んだせいで、喉に強烈な違和感があつた。手近にあつたペットボトルで

喉を洗い流したかったが、水滴で滑る蓋は硬くて開かない。本当に貧弱ひんじやくだなこの身体。

「わたしが開けて進しんぜよう」

皮膚極ひにくまわまる表情で、僕が手を差し伸べてくるが、自分の顔でもむかつく。だんだん一人称と二人称と三人称の、全てがややこしくなってきた。

ふんつ、と大きさに気合いを入れて、師匠イン僕の身体がペットボトルを開栓。殺したいほど癪さむに障さるニヒルな笑みで差し出されたお茶を、僕イン師匠の身体は渋々受け取る。喉と胃の違和感には変えられない。

五〇〇ミリリットルってこんなに重かったつけ？ と思いながらも、ペットボトルを両手で持って口に運ぶ。ボトルそのものがデカければ、飲み口だつてとにかくデカイ。正しくは師匠の身体がどこもかしこも小さいのだが。

「見たか弟子よ、これがパワーだ！」

「僕のね」

いつも通りな師匠の言動が、僕の身体で行われると死ぬほど痛い。自然と僕の反応も冷たくなる。

「弟子が冷たくて、師匠は悲しい」

「僕はあなたが師匠であることが悲しくなってきました」

「まあまあ」と僕を宥めるように、師匠が頭を撫でてくる。絶対に小馬鹿にされている。

「わたしかきみの、どちらかの精神交換剤が溶けてなくなったら戻るから」

「それって具体的にどれくらいですか？」

「たぶん一時間くらい。あとは胃腸の調子による」

アバウトすぎるわ。僕は師匠の入った僕の手を頭に寄せたまま項垂れるが、ついでいちいち状況説明が面倒臭いな、これ。

「中和剤とかないんですか？　あるいは胃腸の調子を良くする薬とか」

「勝手に溶けて戻るものだから、ない。胃はふたつにならできる」

いらねえ。

「今から作れませんか？　可及的速やかに、というか大至急」

「そっちの身体でだったら……」

僕の、いや師匠自身の身体を深刻そうにじっと見つめて、魔法使いはそう告げる。魔法的な要素が絡んで以上、科学世界の人間である僕の身体では、大した魔法が扱えないらしい。

これは……詰んだかもしれない。

そのときの僕は、きつと師匠以上に深刻な面持ちになっていただろう。呼吸をするにも鬱屈だ。「まあ、気長に待とうよ。映画でも見てれば、途中くらいで戻るから」

「いや、そうも言っていられない事情がありまして……」

「諦めるしかないけれど、一応聞いてあげよう」

「どうしてそこまで偉そうにしていられるのか、僕にはまったく理解できませんが——」

溜息を吐きつつ、僕は丁寧^{ていねい}に言葉を探した。いかに遠回しな語り口でこの問題を告げればいいのか、考えて考えて考え抜いて、結論に至る^{いた}。無理。

「元はと言えば、何もかも師匠がいけないんです」

最後の足掻^{あが}きで、僕は話題を引き延ばす。

「不意打ちと言うか、騙^{だま}し討ちと言うか、せめて事前に申告^{しんこく}さえしてくれば、必ず対策が取れたはずなんですよ」

師匠は僕の顔で眉を顰^{ひそ}める。僕が何を言いたいのかわからないのだろうが、僕も何を言ったらしいかわからない。

「それ以前に師匠が先に気付いていれば、こんな状況にもならなかったはずですよね」

言葉にしつつ思考を整理していたら、だんだん腹が立ってきた。怒るついでに話も飛躍^{ひやく}する。

「そう言えば、今日一日でいくつアイス食べたんですか？ 怒らないから言ってみてください」

自分自身を叱^{しか}りつけるという、現状を理解できる第三者の視点から見ると奇妙な光景。師匠は見えない妖精^{しか}さんを追いかけるように、虚ろ^{うつろ}に視線を泳がせる。

「……に、三本」

「それではゴミ箱チェックのお時間です」

「七本食べました！ 反省するからまた買ってきてください!!」

「きません！ そんなに食べるからお腹が冷えるんですよ！ ただでさえ筋肉も脂肪もほとんど付いていないのに!!」

仮にも女性に対して酷い罵声はせいを浴びせた気がしたが、この期ごに及んで気にはしない。断じてこの下着さえ必要のない胸について言及したつもりはないし、意識すると恥ずかしくなる。

「つまり」と一言で閑話休題。話を引き延ばせば引き延ばすほど、問題解決までに費つひやせる時間が失われていく。これ以上の回り道は不可能だった。

可能な限り感情を殺し、死刑執行官の心境を再現する。覚悟を決めた僕の告知は厳肅げんしゆくに、例えるならば余命宣告。

「おしっこしたいです」